令和４年度入学試験問題（一般選抜：追試験）

小　　論　　文

（中等教育教員養成課程）

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること

〔問〕　つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

教育は、人間をつくる（形成する）仕事で、物をつくるのとはおよそ異った営みである。俗に、子どもをつくるなどというけれども、人間は、生命をつくる――したがって生命あるものを「つくる」ことは出来ない。単に人間は、生命をもつものの生れてくるきっかけをつくっているにすぎない。人間が生命あるものにたいして出来ることは、自己のうちに不断に成長する力をもつ生命あるものの成長を助けることである。それ以上のことは、人間には出来ない。生命あるものの存在することが、教育の絶対の前提である。したがって、生命への畏敬の欠けたところに、教育はない。

教育という語には、「教える」と「育てる」の二つの要因がふくまれている。教育の対象が人間である以上、育てるということ、すなわち、成長を助けるという仕事が、その営みの根本である。義務教育が対象としているのは、人生の、最もはげしく成長する時期における子どもたちである。問題を根本にさかのぼって考えるために、生れたばかりの子どもに例をとって考えてみよう。かれらは成長する力そのものであり、可能性のかたまりともいうべき存在である。

ところが、彼らには、不断に成長する力はそなわっていても、成長に必要なもの、すなわち、栄養物が与えられないかぎり、その成長をとげることはできない。そしてかれらは、自力では、その必要なものを確保することのできない全くたよりない（helpless な）存在なのである。だから、かれらを保護し、助けるものがなければ、生きることも成長することもできないのである。だが、この頼りない存在であること自体が、教育の可能性を保証する条件なのであり、親（あるいは、それに代るもの）の庇護（ひご）下におかれている所謂（いわゆる）「親がかり」の時期が、教育の時期なのである。しかも生物が高等になり、また文明が進歩するにつれて、その「親がかり」の時期が長くなるのは、この間に学んで身につけなければならないものが時とともに、質、量ともに複雑多岐になるからである。人間において教育は、決定的な重要性をもつ。それは、人間が若い時に学んで身につけるものの質が、その人間の生き方を決定し、ひいては、社会のあり方に大きい影響を及ぼさずにはいないからである。

私は、教育は人間をつくることで、物をつくるとは全く別のいとなみであるといった。教育の対象は、生命をもったものであり、それぞれ絶対の価値であるからである。ものをつくる場合には、材料を精選し、それを鋳型にいれたり、或(あるい)は、精密な設計と計算された製作工程にたよって、欲するところの製品をつくり出す事ができる。それは対象が物質だからである。物質は一定の属性をもつ。したがって、一定の働きかけに対して、一定のきまった反応をする。だが教育は生命(いのち)をもつ人間の、しかも可能性のかたまりともいうべき若い生命を育てる仕事である。教育を物の生産に準じて捉えるなら、それは、教育の自殺になる。特に義務教育の場合、ある資質、能力あるものだけを対象とする教育は許されないのである。また、一定の働きかけに対して、決して一定の反応を期待する事の出来ないのが、生命あるものの本質であるのである。教育の対象は、あくまでも自己自身のうちに成長する力をもった生命あるものであり、教師に課せられた任務は、その成長を助けて、それぞれの子どもから、その最善のものをひき出してやることである。

出典：林　竹二著『教えるということ』国土社、1986 年、pp.192-194.
（設問の都合により、本文の一部を改変している。）

（問１）

下線部「義務教育の場合、ある資質、能力あるものだけを対象とする教育は許されないのである。」というのはなぜか、80 字以内で述べなさい。

（問２）

あなたは、将来中学校の教師として、教師の使命や役割を果たすために、どのような大学生活を送るべきであると考えますか、あなたの脳裏に描く自身の学生像について、400 字以内で述べなさい。